

幼 児 の 教 育

昭 和 九 年 十 二 月

霜 柱

幼稚園の庭に初めての霜が来た朝である。ほか／＼と暖い日光を浴びながら保育室の入口に立つてゐると、二人の子どもが馳けて来て、いゝものを見せてあげようと言つて手を差し出した。可愛い、兩手を重ねて大切そうに何か持つてゐるのである。何んでせうと私が聞くと、容易には見せられないといった顔付きを見かほして、二人いつしよに手を開いた。一人の手には溶けかけの霜柱が、それでもまだ氷の形をして白く残つてゐる。次の子の手には、泥にぬれた赤い掌の中で、霜柱がもうすっかり溶けて仕舞つてゐる。

心なの霜柱よ。なぜ、どの子にも握られてゐて呉れないのか。

先 生

藤の柄を一握りもつて、女の子が二人私の室へ来た。これで編んで呉れといふのである。私は閉口したが卒直に出来ないと言へた。そして、先生にして貰ひなさい。先生はお上手ですよと言ひ添へた。「倉橋先生も先生じゃないの？」生真面目な顔である。そして、「ねえ……」と長く引いて二人が顔を見あはせてゐるではないか。

先生に二種あり。満足を與へ得る先生と與へ得ない先生と。此の場合、まさかそんなこともいへない。先生のところへ馳けてゆくその子ども達を、入口のところまで丁寧に送り出したのが、その時のせめてもの私であつた。

(倉橋 惣 三)